

イエスの自由とその「真意」

(ヨハネ八・三二―五九)

If you love somebody, set them free. (愛してるなら、自由にしてやれよ) これは我が青春のメロディの一節だ。人は束縛を嫌う。真実に愛するなら、その人の行動や心を束縛するのではなく、自由にしておくことが何より大切だということだろう。あるブルグにはこうあった。「縛らない。それが愛を深める秘訣」。うーん、深い。

閑話休題。今朝の箇所の劈頭にある「真理はあなたがたを自由にします」は国会図書館の銘文にもなっているほどの有名なことばであるが、この言葉に続くイエスとイエスを信じた(！)ユダヤ人たちの対話は、私たちが考えがちな「いいお話」、即ち信じたユダヤ人たちが感動のあまり落涙し、「主よ私は悔い改め、今は自由になりました、感謝、ハレルヤ！」となるのは全く正反対である。「ハッピーエンド」ならぬ「バッドエンド」だ。何せイエスは怒りに満ちたユダヤ人たちの半ば集団リンチに近い空気の中、宮を退散されたのだから。以下このセクションから、イエスを信じたユダヤ人たちの自己理解と、イエスが見たユダヤ人の真相について学びたい。

一・自由なる優良種

前段のイエスとユダヤ人(パリサイ人も含む)たちの対話はあまりかみ合うものとは言えなかったが、それでも多くの者がイエスを信じた。しかしその「信じた」者たちに語られたイエスの真理のことばは彼らの信仰が浅はかであることばをあぶりだした。彼らはイエスのことば「真理はあなたがたを自由にします」に躓いたのだ。「自由にする(解放する)」とはその前提に「隷属」があるのはいうまでもない。ところが彼らはそこが分からなかった。というのも彼らは自らが隷属状態にあることを認めていなかったからである(三三節)。確かに当時のパレスチナはローマの属国であり、真の独立とはほど遠かったが、彼らは霊的な意味では自らが隷属しているとは露ほども思わなかった。ましてやイエスの言う「罪の奴隷」としての自己理解など毛頭なかった。しかし属国としての屈従状態の中、彼らは一体何によって自由を叫んでいたのか。それは血統、言い換えれば民族の誇りである。自らを「アブラハムの子」であるとして誇り、そこに望みを置いたのだ。「優良種たる我等こそ、人類を救い得るのである」はあのガンダム敵キャラの名演説だが、彼らは自らの血統に頼り、「隷属の中でも心は自由だ」と叫んでいたのだ。しかしイエスはそれとは全く異なる見解をもっていた。

二・不信仰な罪の奴隷

ではイエスはどのようにユダヤ人を見ていたのだろうか。まずイエスの目に彼らは解放されるべき奴隷として映っていた。ここで重要なのは彼らの隷属状態そのものに目を向けると共に何によって支配されているかを見ることである。答えは明白だ。イエスは彼らを罪の奴隷だと喝破した。どんなに血統の優秀性を語ったところで内実が伴わなければ意味はない。能書きはご立派で桐箱に入ったブランド品のメロンも不味ければお話にならない。だからイエスはもし自らを信仰の父アブラハムに結びつけるのなら、アブラハムのごとき信仰の従順を見せよと彼らに迫った(三九節)。次に見えてくるのは不信である。こういうと「でも『彼らはイエスを信じた』と書いてありますよ」と言う方もあろう。そう、彼らはその時はイエスのことばを知り、一定の認識とともにそれを承認した。しかしこの福音書の、否、新約聖書全体を貫く「イエスを信じる」とはイエスについて一定の知的理解を持つことでは決してない。むしろパレスチナ北部の訛りをもつ元大工の青年が私たちを解放するために神のもとから来られたことを聞き、信じ、従うことである。この区別の最後、一度は信じたユダヤ人たちがイエスに投石する場面は実に興味深い。彼らはイエスの語ったことばが分か

らなかつたのではない。意味はよくよく解っていた。しかし彼らはその言葉に対する正しい行動についての理解がなかったのだ。それは十字架上でも同じだった。だからこそ主は「父よ、彼らをお赦しください。彼らは何をしているのか自分ではわからないのです(ルカ二三・三四)」と言われたのである。

* * *

「クリスチャンはおせっかい。だから嫌いだ」「俺の好きにさせてくれよ」「自由、自由っていうけれど、結局は宗教で縛ってるんじゃない?」「ほらステイングも歌ってたでしょ『愛してるなら、自由にしてよ』って」そういつたことばが聞こえてくることがある。特に教会が伝道的になつてくるとこの種の言説は必ず出てくる。もし人が生まれながらにして自由であるなら、この批判は当を得ている。しかし聖書はそうは言っていない。むしろ人間は一人残らず罪の奴隷であり、多くの人は「失われつつある」生を、その事実を知らずに生きていっていると主張しているのだ。そうであれば人類に必要なのは「隷属」からの「解放」であつて、「勝手にしやがれ」ではない。友人曰く「愛はおせっかい」だそうだが、おせっかいの愛こそが世界を救うのだ。友よ、私たちもこのイエスの愛に生き、解放の音信を伝え続けよう。 Set them free!